

目加田説子 教授

「机上の学び」にとどまらず、
現場に足を運び見て、感じ、考える。
事前学習と体験との組み合わせで、
学生を知的・精神的な成長に導く。

NPO/NGO論の専門家であり、自身もNGOに所属して対人地雷やクラスター爆弾の廃絶活動に取り組んでいる目加田先生は、まさに「実践の人」だ。
本学では、社会の構造を解き明かしながらNPO/NGOが担う役割について伝える講義を担当するほか、徹底した「現場主義」を掲げるゼミを主宰。
国内外のさまざまな地域へゼミ生を伴い、気づきと発見を通して、彼ら彼女らの中に生きた知識と洞察力を育てている。「学生たちの間では、私のゼミは厳しいことで有名なようです」と快活に笑う先生に、お話を伺った。

NPO/NGOは、政策提言も行う プロフェッショナル集団

NPOやNGOについて、何となく「ボランティア団体のような組織」と捉えている人は多いのではないだろうか。そこで目加田先生に解説をしてもらった。「NPOとは民間非営利組織、NGOは国際協力を携わる民間団体のことです。この2つは、いわゆる「第三セクター」に属します」
第一セクターは政府、第二セクターは収益事業を行う民間企業、そしてNPOやNGOが含まれる第三セク

ターは政府から独立し収益事業を主目的とせずに活動する組織を指す。これらのセクターが協力しながらさまざまな取り組みを行うことで、社会的な課題の解決が図られている。
「日本ではNPOやNGOというと災害時に救援物資を運び込んで配布したり、海外の難民キャンプで支援活動をしたり、というイメージを持たれがちですが、それはNPOやNGOが担う役割のごく一部でしかありません」先生は、NPO/NGOの役割は大きく分けて2つある、と話続ける。「1つは、多くの人がイメージするように被災地支援などの

サービスを提供すること。そしてもう1つが、アドボカシー（政策提言）です。この、アドボカシーを行うことがNPO/NGOにとつてとても重要な活動となります」これは到底、意欲や熱意だけで担える役割ではない。その分野の専門的な知識や、幅広く情報を集めて分析する力、また目指すものを実現するためにどのような政策につながるかといった政治的な意識が必要である。さらに、これらを統合して戦略的に考え、行動する力も求められる。「つまり、こうしたスキルをもった人たちの集まりであるNPOやNGOは、その分野

のプロフェッショナル集団なのです」
しかし、日本ではNPOやNGOへの理解がまだ十分ではない。「第三セクターが成熟して一定の立ち位置を獲得しているのは、国際的に見ると民主主義が確立していたり、市民活動の重要性がきちんと理解されている社会です。残念ながら日本では社会の現実が厳しく、また第三セクター自体も未成熟。NPOやNGOが本来の使命を果たしているか、政策提言まで行うプロフェッショナル集団として見られているかというところ、その水準に達していないのが実情だと感じます」

複雑化する現代の課題 NPO/NGOが解決のカギを握る

しかし、課題の多くがそれぞれ複雑に入り組んでいる現代では、NPOやNGOの存在がこれまで以上に重要になる、と先生は考えている。「今、私たちが直面している課題は、例えば地球温暖化などの環境問題のよう

に、一ヶ国だけでは解決できないものが多くなっています。また、貧困や教育格差、高齢化のように、いくつかの国が共通して抱えている課題も多々見受けられます」

こうした課題の解決に向けて、国と国が協働できることはたくさんある。しかし、それを政府（第一セクター）が主体となつて行えば当然それぞれの国益が重視されるし、民間

企業（第二セクター）であれば自社の利益が最優先事項となる。こうした場面で、第三セクターであるNPOやNGOの存在意義が発揮される。

二酸化炭素の排出量取引を例に考えてみましょう、と先生は説明を続ける。「政府が交渉にあれば自国の産業を守ることが第一の目的になるでしょうし、企業ならばできるだけ自分たちのビジネスを阻害しないよう交渉を進めようとするでしょう。

これでは、地球全体の二酸化炭素排出量を抑える、というそもそもの目的が形骸化してしまいかねない」ところが、NPOやNGOには特定の存在の利益を守る、という行動原理がない。従って、交渉本来の目的を遂行するために相手と踏み込んだ議論をしたり、理想の実現に向けた行動に踏み切ることもできる。NPOやNGOは、現代に山積する複雑な課題を解決に導くカギになり得る存在なのだ。

「政府と民間企業、NPO/NGO。どれがいい悪いではなく、それぞれ



合宿では、国際協力機構（JICA）がスレブレニツァで実施している信頼醸成のための農業・農村開発プロジェクトを視察。スレブレニツァ市長と地元の若者との一枚。

の特徴を理解して協働し、時にはせめぎ合うことでより良い方策を見出していく。そうした姿勢を理解することがこれからは大切なのではないだろうか」そう語る先生は、授業を通じてNPOやNGOについて知識を深め、セクター間をつなげるスキルを持つ人材の育成を目指している。「NPOやNGOの人間が第一セクターと協働する時には、政治や官僚制度の論理や思考、慣習を理解しておく必要があります。相手が第一



目加田 説子（めかた もとこ）

上智大学外国語学部卒業。アメリカ・ジョージタウン大学修士課程修了後、NPOやテレビ局に勤務。その後、アメリカ・コロンビア大学修士課程修了、大阪大学大学院国際公共政策研究科博士課程修了（国際公共政策博士）。経済産業研究所研究員や東京大学客員助教授等を経て、2004年4月より中央大学総合政策学部教授。著書に『地球市民社会の最前線—NGO・NPOへの招待』（岩波書店）、『行動する市民が世界を変えた—クラスター爆弾禁止運動とグローバルNGOパワー』（毎日新聞社）など。専門は国際政治学、NGO論。



2016年ゼミ合宿の一コマ。ボスニア・ヘルツェゴヴィナの小学生たちと。



セルビアの学生とともに、核兵器廃絶について考えるワークショップも実施。



スレブレニツァ虐殺の慰霊碑。ついこの間まで地域で共存していた人同士が殺し合った事実を、「実際に起こったこと」として学生たちは重く受け止めた。

を踏まえてゼミ合宿が行われる。2016年夏に目加田ゼミが出かけたのは、なんと南東ヨーロッパのボスニア・ヘルツェゴヴィナ、クロアチアの三国。旧

スレブレニツァ村で約8,000人のボシュニャク人（イスラム教に改宗した南スラブ人の末裔）が殺害された。「スレブレニツァの虐殺」と呼ばれたこの事件が起きた背景や経過、国際社会に与えた影響などを調査した。さらに援助班では、ユーゴスラビア紛争が一応の鎮静を見た後、世界の国々、特に日本がどのような援助を行ったのかを調べていった。「このように、事前学習をかなり綿密に行った上で現地に足を運びました。合宿の主目的の一つが、スレブレニツァの人々と交流すること。あのような大事件が起こった地域ですから、重々しい雰囲気覆われているだろうと学生たちはイメージしていたようですが、実際に行ってみると人々は穏やかな暮しを営んでいた。歴史的な事実とのギャップに、皆驚いたようでした」

「現場主義」の目加田ゼミ。 2016年には南東ヨーロッパへ

セクターの場合も同様です。私たちには高い理念がある、だから自分たちの信じた道を行く。では自己満足にとどまってしまう危険性があります。互いの力を最大限発揮させながら課題解決にあたるには、それぞれのセクターの個性や社会の構造について熟知していなければなりません」

社会を俯瞰する視点を育み、さまざまな領域への知識を深め、時にそれらをコーディネートするにはどうしたらいいかも考える総合政策学部は、NPOやNGOの人材に求められるスキルを身につけるのに絶好の環境だと先生は言う。

先生のゼミはNPO/NGOはもちろん、地球規模での考察が必要となる課題などを取り上げている。その運営について先生に訊ねると、卒業論文とゼミ合宿に力を入れている、という答えが返ってきた。

特にユニークなのがゼミ合宿だろう。年度初め、目加田ゼミではゼミ全体で行う研究のテーマと学生それぞれの役割を決め、夏までの数カ月をかけて学習を行う。この事前学習

ユーゴスラビアからのボスニア・ヘルツェゴヴィナ独立をめぐる1992年に発生した内戦（ボスニア・ヘルツェゴヴィナ紛争）と関わり深い地域である。

この時は、ゼミ生が複数の班に分かれて事前学習を行った。例えば歴史班。旧ユーゴスラビアの歴史的な変遷、また第二次世界大戦からボスニア・ヘルツェゴヴィナ紛争を含むユーゴスラビア紛争発生までの経緯や終結への流れ、その後の状況などを調べた。次に、スレブレニツァ班。ボスニア・ヘルツェゴヴィナ紛争中の1995年7月、この地域にある

ゼミ生たちは、現地の大学生や高校生と交流し、人権や核兵器について一緒に考えるワークショップなどを行った。こうした出会いでも学生たちはカルチャーショックを受けた

ようだ、と先生は振り返る。「英語にはそれなりに自信があったのに現地では今一つ通用しない、ということがあった。また、ボスニア・ヘルツェゴヴィナは現在、経済状況がとても厳しく失業率が50%を超えており、現地の若者たちが抱く将来への切実な思いや学びへの真剣さは、日本の学生たちとは比べものになりません。もっと実践的な英語力を磨かなければとか、同世代の人たちがこんなにも真剣に生きているのに自分はふがないとか、思うところも多かったようです」

合宿後、ゼミ生たちは報告書の作成に取り組み。事前学習の内容や現地での体験を通じて知ったこと、発見したこと。そして感想などを皆で協力して一冊にまとめる。先生の机の上には歴代のゼミ生たちがまとめた上げた報告書が何冊も積み重ねられていた。これまでに北海道・青森や沖縄、また韓国やカンボジアなどを舞台にゼミ合宿を行ってきたのと。ゼミ合宿に力を入れる理由を、「学びを机上の空論で終わらせないため」



ゼミ風景。「調査が不十分など、気づいたことはどんどん指摘します。初めは良い感想しか口にしない学生たちも次第にシビアな指摘もするようになり、高め合う姿勢を身につけています」

多様な声を受け止めながら 自分の考えを構築できる力を

と先生は語る。「とにかく現地足を運び、気づきや発見を通して状況を深く理解する。そうして初めて知識が生きたものになります。またこうした体験は、先ほどもお話したように学生の精神面にも大きな成長をもたらすと実感しています」

さてその一方で、ゼミ生たちはそれぞれ卒業論文作成に向けた研究を行う。ゼミ合宿と同様フィールドワークを伴うものが多い、と先生は言う。「ある学生は沖縄でのゼミ合宿をきっかけに在日米軍基地問題に関心を抱き、山口県岩国市や青森県三沢市など、米軍基地がある他の地域にも足を運んで調査を行いました。また、市民と警察が協力して地域の治安を回復する「コミュニティ・ポリッシング」の調査研究を行うため、学部ニューヨークに向かった学生もいます」

とは言え、ゼミ生の多くは研究者を目指すのではなく、ほとんどが企業に就職したり公務員になったりする。従って先生はアカデミックな成果を求めるのではなく、自分でテーマを設定して調査し、結果をレポートにまとめプレゼンテーションするという、就職後に活躍する際、基盤となるスキルが身につくよう指導を行っているそうだ。「また、あるテーマについて調べていくとほとんどの

場合、肯定と否定、賛成と反対といったように、両極端の言説を目にする事になります。いろいろな視点や立場に基づく意見を受け止めながら、自分でも現場を見て状況を確認したりして、他者に流されず自分の意見を構築できる力を育んでほしいとも思っています」

高校生の皆さんへ

大学で学ぶ目的の一つは、自分の知らない自分に出会うこと。「英語が嫌い」「人前で話すのが苦手」など今の段階で自分の能力を決めつけず、柔軟にいろいろなことに挑戦していただきたいと思います。若いあなた方には、どのようにも成長できる無限の可能性があるので。

そして、互いに刺激して高め合える仲間にも出会ってほしい。辛いこと、大変なことがあっても、仲間と一緒に乗り越える力が湧いてきます。新しい自分、良い仲間との出会いを楽しみに、勇気をもって未来へと歩んでください。